

Alma Mater

白陵

No. 1

昭和56年12月10日発行
発行白陵会
〒676
高砂市阿弥陀町阿弥陀2260
TEL. 07944 (7) 1 6 7 5

あゝ白陵の春の宵

学園創立二十周年

会員の皆さん、こんにちは。めっきり寒くなりましたが、お元気で過ごしていることと思います。

あなたは、白陵を卒業されて何年経ちましたか。目を閉じると、在学中のいろいろな思い出が浮んできませんか。歳月の経つのは早いもので、母校は、来年創立二十周年を迎えようとしています。今日の白陵は、我々卒業生ひとりひとりが作ってきました。白陵は、あなたが作った学校です。それだけに、我

々が白陵を思う心には、万感の思いが込められています。白陵が、今後ますます発展するよう暖かく見守っていききたいと思えます。

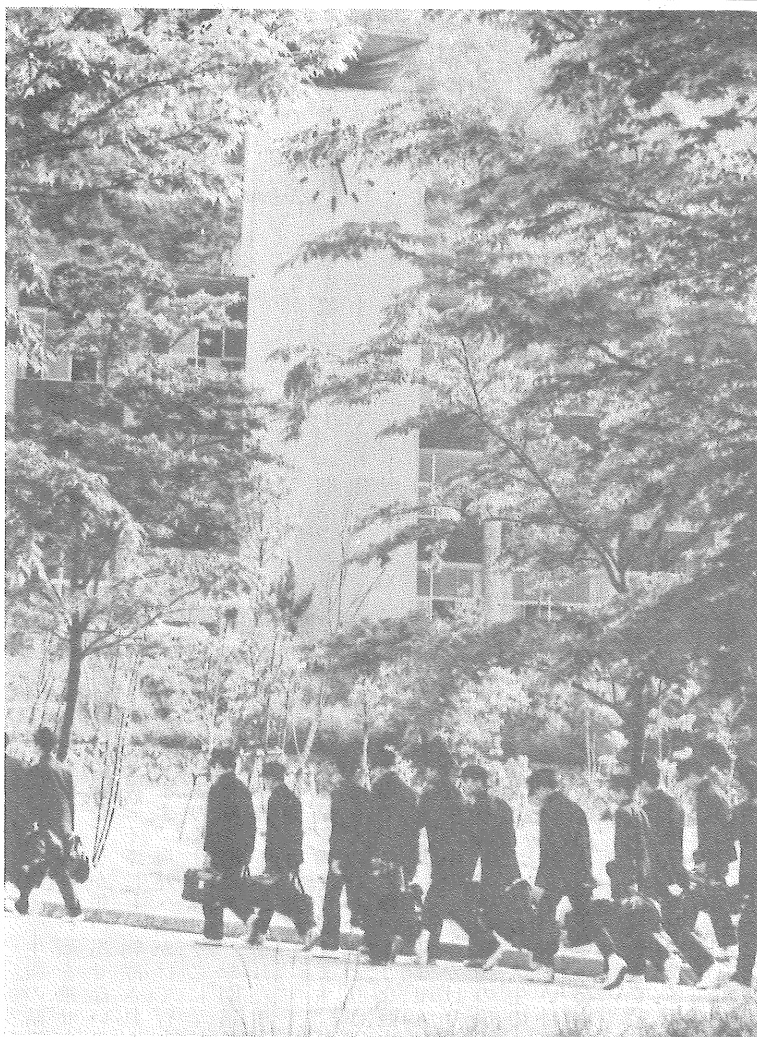
躍進する白陵会

昨年の白陵会名簿作成につきましては、ご協力ありがとうございました。名簿の各ページでは、会員の皆さんがそれぞれの分野で立派にご活躍なさっている様子を拝見し、前途洋々たる姿を思い、大変勇気づけられました。まだまだ若い白陵会ですが、皆さんの暖かいご支援で、素晴らしい同窓会に育てていきたいと思えます。どうか、よろしくお願い申し上げます。

ファミリーな会報誕生

総会にかわる会員の皆さんと白陵会との掛け橋として会報を作りました。タイトルは、「Alma Mater 白陵」。我が母校、白陵の意です。会報といっても、決して堅苦しいものではありません。懐かしい母校を思い、友を思い、気軽に読んでいただけるものです。これを機会に、会報を「広場」として大いに利用していただき、同窓生の絆が一層深められますよう希望いたします。

なお、会報を発行するにあたり、紙上をおかりしまして、創設期の白陵会に多大なご尽力を賜りました遠山前会長はじめ、役員の方々に、心から「ご苦労さまでした」とお礼申し上げます。



同窓会のみなさんへ



学園長 三木省吾

今年の秋は随分と足早やで、秋空に赤とんぼが群れて運動会の季節が終了と思うと、二三日うすら寒い秋雨と曇天が交互に続いて、学校の裏山は真紅に色づき、十一月の始めというのに一足跳びに冬に入った感じがです。

さて、卒業生のみなさん、お元気ですか。私は不惑はとつくに過ぎて、今は知命の齡。薄くなりかけた頭を氣に

しながら、いつものように、元気に授業を続けています。一期生のみなさんから十六期生まで送り出して、学校は来年賑やかに創立二十周年を迎えようとしています。一期生の人達は既に三十才を越して、今や社会の中堅になりかけておりましようし、十六期の人達はまだ学窓で将来の飛躍を夢見て研鑽中でありましよう。しかし、私にはど



会報発刊にあたって



会長 黒坂康夫

白陵高等学校同窓会会報「我が母校白陵」が、黒川芳一副会長はじめ編集委員の努力によって発刊されることになりました。

卒業して久しく、今紅葉に色づく白陵の森を思い浮べながら、独特な帽子をかぶって友人達と未来を語り、人生論をぶつつけあい、泣き笑った青春

の時を昨日の事のように感じている私であります。今と比べて時の流れがゆっくりとしていた時代に、私は本館の建築物を眺めながら、プレハブ校舎でエンマ大王のパンチの洗礼を受けました。が何とも暖かく思い出されてきます。十数年経った今、飛躍的に成長した白陵の雄姿を見る時、一言、三木園長先

の回生の人たちも、黒い学生服の詰襟の上に生真面目な若々しい顔を乗せた白線帽の姿としてしか思い出せないのです。卒業後、不幸にして物故された人達もあります。海外へ出かけて行った人達もありません。私はそこに学校の経てきた年輪を感じます。学園道路に高く聳える樺の並木は紅葉した樹冠を冷い空に静かにさし伸ばし、すでにどうにかみなさんのひとりひとりが、それぞれの場で、この樺のような巨木になられることを祈って止みません。

今、自分の人生の中で、多少かげりのある時期にある人も、逆に高揚の頂点におられる人も、これは長い人生の一期に過ぎないと観じて、新しい目標

生に、「ごころうさま。」そして、増々、園長先生の教育理念が完成されまことを心からお祈り申し上げます。

我々、同窓生は、感じ方こそ違え、兄弟姉妹であります。世を思う心に違いはありません。白陵の場に集まり、強い団結心をもって助け合いながら、我が母校白陵を誇りとし厳格な人生を歩んでいきましよう。

五十七年十一月には、白陵会館が完成する予定であります。この会館は、同窓生が思い出多い学園の中に皆様で集まっていただけ、楽しい一時を過ごして下さる事を主旨としています。各期とも、どしどし同窓会にご利用下さ

向って、一步一步、真摯に生きて行くようではありませんか。人生は他人から教えられることの方が遥かに多い。良き先輩を持ち、また良き後輩に恵まれる。これが白陵の同窓会の特色でありましよう。どうか卒業生のみなさんが、相寄り、相助けあつて、創立二十周年を機に、各地域各職域に支部をつくり、それが枝葉となり、根を張り、幹を太らせて、白陵という巨木が未永く聳えることを心から願っております。

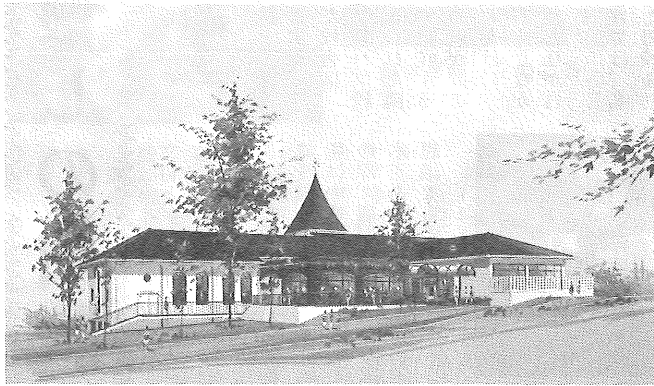
終りに臨んで、各回、同窓生のみなさんのご健勝とご活躍をお祈りいたします。

さて、この会報は、今後期を重ねるに従って、充実したものにならんと考えています。色々な意見又話題を、白陵会まで送って下されば幸いであります。

寒さに向かう折、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

学園創立20周年間近!

記念事業の成功を期して



来る昭和五十七年十一月九日、我が学園は二十回目の誕生日を迎えます。最近の卒業生から振り返ると、プレハブ教室三棟で出発したことなど、きつと夢の様に感じられることでしょう。

さて、学園当局も、二十周年記念事業の一環として写真の様な白陵会館（仮称）の建設を目指しています。本会館は、勉学にいそしむ我々の後輩の唯一の潤いの場となるばかりでなく、各期各種同窓会相互の親睦を深める上でも役に立つと思われまます。建物内容は別記の通りですが、白陵会としても一致協力して、記念事業が円滑に進展することを望んでいる次第です。

白陵会館構想

○建設予定地

本館校舎南雑木林内

○面積

約一、〇〇〇平方メートル

○施設

図書館（書庫別）

集会場

（二〇〇名収容可）

ホール

和室（浴室付）

喫茶室（在校生用）

姉妹校誕生

二十年の間には数々のことがありましたが、中でも一番大きな出来事は、姉妹校岡山白陵の誕生です。岡山県東部緑なす熊山の地にあって、白陵の教育理念を伝承し、着々とその地盤を固めつつあります。施設も、寮、体育館等完備し白陵の良きライバルとなっています。

学園成人式への期待

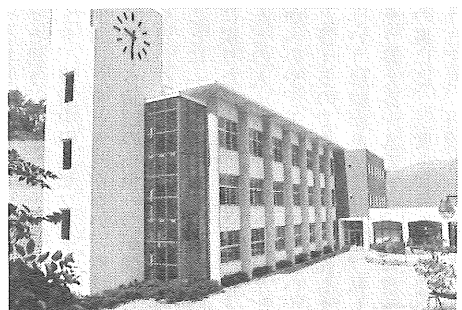
我が学園の僅かの間の急成長、急発展は、他校に類を見ない感じがします。世間の風評以上に、同窓会員として改めて自負の念を強くされる方々も多いことでしょう。

二十周年を契機として、大学進学は言うに及ばず、心身共に健康な全人的社会人育成の場として、将来への一大飛翔を期待して止みません。

白陵会は学園の愛し子

年令こそ違え、白陵会員は良きパートナー、良き兄弟姉妹。在学中に培われた友情は永遠のものと確信しています。

今、母たる学園の事業推進に、微力ながらもお互いに積極的協力と呼び掛けましょう。



創刊 懐しの白陵

1 回生 (昭41年卒)

正井 和野

今でこそ、別館、新館と立派な白亜の校舎が建っていますが、初期の一年間私達が学んだ校舎は、透き間風の入る粗末なプレハブ校舎でした。板一枚でしきられた隣りの組から生徒を大声で叱咤する園長先生の、あの独特の声聞いてきたものです。それだけに、新校舎へ移る時はわくわくしながら、あの坂道をひとりひとりが自分の机を運んだものです。

先生方の努力で、現在では、名実共に西の灘校となった母校を訪ずれ、立派な校舎を見るたびに、プレハブ校舎で学んだ懐かしい日々を思い出します。

2 回生 (昭42年卒)

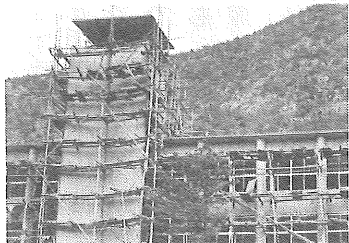
石田 宗親

園長の授業前、ガヤガヤ騒いでいた教室が、遠くの足音ひとつで静まり返り異様な雰囲気包まれたのを思い出す。しかし無茶苦茶難しい英語の教科書があったなあ。園長と目が合わないように、前の人の陰にかくれていたものだ。「チカ、チカ」と呼ばれた瞬間、「ドキッ……。後はあきらめの心境で、



昭和38年当時

建設中の本館校舎



3 回生 (昭43年卒)

沼田 好道

卒業してから約十三年になりました。今、白陵時代のことを思い出すと、まず園長先生のトーマス・ハーディーの授業、単語テスト通学鞆を持つての遠足、大きなハリボテを作った運動会、ボールのよく入る池など色々あります。その中でも「ドブ中」こと堀中先生が卒業近いある日、「三期は三太郎といつて、みんな非常に可愛く思っている。良い成果を期待している。」と私達を激励してくださいましたことがありました。その言葉に励まされて受験に望んだことは私の忘れられない思い出です。

4 回生 (昭44年卒)

鎌田 芳寛

二年生の時だったと思うが、運動会でデコレーションを作った時のことだ。クラス全員がお互いの役割分担を決め、一つの目標に向かって作業を行った。凶案を考える者、外装の紙の色を塗る者、雨に濡れながらも骨組みの竹を切り出す者等、遅くまで頑張った。

運動会当日、父兄の方の投票でクラス全員が協力して作ったデコレーションが一位になった。皆が晴々としたすがすがしさを覚えた共有できる思い出である。

5 回生 (昭45年卒)

清瀬 明久

昭和三十九年早春、小生は人生の一大岐路にあつたと、子供心にもおぼろげながら記憶している。岐路、それは白陵中学校の入試に他ならなかった。首尾よく白陵の合格証を手にしたままでは良かったが、以来六年間勉学面に数知れない波風を立て、両親を悩ませつつも卒業式に親を列席させ得た。他人は失笑するかもしれないが、今振り返れば幸運の占める割合が大きいと述懐している今日今頃である

6 回生 (昭46年卒)

上田 喜裕

僕の場合、六年間の学園生活があつという間に過ぎてしまったような感じがする。そしてその中にある思い出と言えば、やはり長い間教えて下さった園長をはじめとしてのユニークさにつけるのではないかと思う。今、当時教えて下さった先生方はどうなさっているのか、一度お目にかかりたいと思う。これは六回生のほとんどが同じ気持ちであると思う。

だから一度お会い出来るような機会を同窓会で作って下さい。

7 回生 (昭47年卒)

村住 正英

体育館を建てる槌音が響く昭和四十一年春、わが白陵時代が始まった。以後卒業までの六年間、何と云つても忘れられないのが、園長先生の事である。最初の授業でアルファベットを最後から言えといわれて戸惑つたこと、中二の冬の補習を夜九時までやったこと、正月の三日に十課分の暗唱をしたことなど。今では懐かしい思い出である。

8 回生 (昭48年卒)

原 正

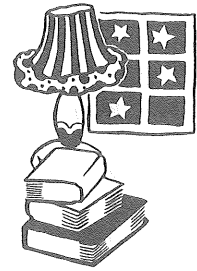
白陵を卒業して早いもので、もう十年を迎えようとしている。同窓会などで当時の友達と会い、白陵時代の話を始めると、白陵という学校は話の種なんと多い学校かと思う。先生一人一人のエピソード、授業中のエピソード、その他話したときりがない。歓談、談笑する話題の一つ一つが懐かしく思われる。ところがおもしろいことに「それではもう一度、当時に戻りたいか?」と聞くと、ほとんどの人(もしかすると全員?)が「いや、二度と戻りたくない」と答えるのである。みなさんもそういう経験がありませんか。私もそう答える一人ですが、その言葉の裏には、二度と戻りたくはないけれども、白陵という特徴ある今

思い出深い
旧大教室



働きざかり?のころ

高校時代、私は野球部にはいたったので白陵時代の思い出といえば、クラブ活動のことばかりです。特に三年の時、野球部発足以来、初勝利を挙げることができ、試合翌日の新聞に大きく書かれた「白陵、初白星へ粘り勝ち」という文字が、いまもはつきりと思い出されます。高校野球の季節になれば、高校時代のこと懐かしく思い出されてなりません。最後に、白陵時代によき師、よき友を得られたことは、これからの人生によき灯となると思っております。



15 回生 (昭55年卒)

宮井 仁

思い出といっても思い出すと共に、苦笑いを伴うようなものばかりであった。そしてその一つに、今ではもう廃絶されたが、寮祭のようなものがあった。身内の話になるかもしれないが、もう一度あの時の、あの芸をしろと言われたのも決まらぬことを平気でやったものである。白陵時代には、そういうことが星の数ほどあった。懐かしいというよりも、恥ずかしい思い出と言った方が適切かもしれない。

11 回生 (昭51年卒)

志方 正彦

白陵、その思い出というならば私にとって、まず中学時代では、川戸先生がおられた頃、夏期補習後に実施された訓練があげられる。高校時代では、くじ運に助けられつつも勝ち進んでいった高校野球県予選の応援が挙げられるであろう。何故なら、共に白陵の持つ独特の厳しさと当時の活気を思い出させてくれるものであるから。

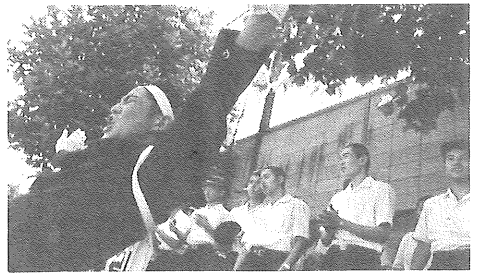
13 回生 (昭53年卒)

水田 堅

「次、〇〇、これは何形か」という声が飛ぶと同時に胸を撫下ろすといったあの苦しかった放課後の補習の光景が、白陵という言葉で思い起こされます。ただでさえ苦手の英語の授業が多いのに、何んで放課後まで付き合わされるのかと毎度のように思いました。しかし、補習のない日の放課後は、某クラブの練習の合間に裏山に登ったり、体育館で騒いだことなど楽しく思い出されます。

14 回生 (昭54年卒)

竹中 邦夫



全校挙げての野球応援

16 回生 (昭56年卒)

白水 晃生

十五回といえ、卒業して一年半、今そのほとんどが大学に学び、高校生活からは想像もつかないようなクラブ等で活躍しているとよく耳にする。また全体としても前池君を会長とする同窓会「はらから会」でひとつの輪となっている。そういう風には、まだ高校時代を懐かしむというより、大学生活を夢中でenjoyしているという時期にある。だから、まだ思い出を語り合うには、いささか時期尚早という気がする。だが、休暇時期に入ると、突然の卒業生の来校に先生方をびくりさせている者も少なくない。さらに、これからはその人数もきつと増えていくことであろう。

山本 峰之

皆様いかがお過ごしですか。我々九回生は、毎年全組をあげての同窓会を開き、親睦を深め、白陵の着実な発展を心から誇りに思っています。なお、今回も例年通り同窓会を開きたく思いますので、九回生の皆様どうぞよろしくお願いたします。日時、場所は追って各自にお知らせします。

から思えば味のありすぎる学校を卒業したという自信とプライドが窺えると感じるのは、私の一人よがりであろうか。

10 回生 (昭50年卒)

吉田 達矢

大学卒業後、姫路へ帰って来て働いていると、たまに、ふとした所で白陵の先輩に会う事があります。その時、偶然その人の同級生を私が知っていたり、又その逆の場合があつたりして、すぐその場で親しくなつてしまいます。生徒数が少なく学年全体の補習があつたり、全生徒の成績が発表されたりして、困ったことの方が多かったのですが、今となっては、こういう特色のおかげで、内容の濃い人間関係が生み出されているのだなと思われています。

12 回生 (昭52年卒)

樽井 久樹

「次、〇〇、これは何形か」という声が飛ぶと同時に胸を撫下ろすといったあの苦しかった放課後の補習の光景が、白陵という言葉で思い起こされます。ただでさえ苦手の英語の授業が多いのに、何んで放課後まで付き合わされるのかと毎度のように思いました。しかし、補習のない日の放課後は、某クラブの練習の合間に裏山に登ったり、体育館で騒いだことなど楽しく思い出されます。



川戸茂先生 (孤舟)

俳句と私

阿弥陀の谷川沿いのバラック校舎に呱呱の声を上げた白陵がもう早や創立二十周年を迎えようとしている。まことに烏兔々々の感が深い。その当時の紅顔の美(?)少年達ももう三十過ぎの働き盛り。こちらも何時の間にか今年で古稀を迎えた。

白陵にお世話になった十年間、学園長の補佐役でありながら力及ばず何らお役に立たなかつたことを今もって申し訳なく思っている。だが、この十年間は私の人生にとても大きな収穫の年であつたと同時に、思いがけない方向転換の時期でもあつた。収穫のことについてはまたの機会に譲るとして、方向転換のことについて一寸述べさせていただきます。

まで何も知らなかつた俳句の世界に足を踏み入れることになった。その後、山本先生(現在ホトトギス同人)のご懇切なご指導で少しづつ俳句が楽しくなり、悲嘆の谷底から這い上がることが出来たのである。

縁というものは不思議なもので昭和四十六年京都に「嵯峨野」という俳誌が生れそれに加入して主宰高桑義生先生のご指導を受けることになり、後その編集長に推され高桑先生の代筆も勤めるようになった。昭和五十六年七月高桑先生が急逝され、いきなりその後を襲つて朝日新聞京都版の俳句選者を委嘱されることになったのである。思えば人生どこでどのようにに賽ころの目が変わるか全く判らないもの。今日の一日を誠実に生きるこの大切さをしみじみと思ふ今日このごろである。

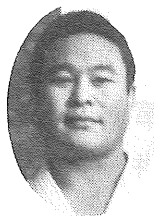


大島俊郎先生

思い出すままに

新しい同窓会誌の創刊にあたり何か短文をという事なので、久しぶりに一回生の卒業アルバムを取り出して頁を繰ってみた。巻末の方に、開校当事の懐しい教棟のレハブの職員室や、教室の写真が載つており、また次第に本館が出現して行く様子が写っているのを見て、テントの下での初めての入学式や、文字通り、夏の炎天下の熱気あふれる暑い授業、一日も早く終つてほしいと思ひながら暮した工事現場の騒音等、一度に思い出した。高三で担任をした一組の諸君は勿論、全クラスの授業に出ていたので、各頁に写っているどの顔を見ても、性格や当時の色々の出来事まで次々と脳裏に浮んできて、人間、案外古い事まで覚えておられるものだと変に感心した。なにしろ、先生も生徒も初めての事ばかりで試行錯誤の連続ながら何とかやって来られたのも、新設校の基盤を作らねばという皆の意気込みが支えとなつたのであろうと思われる。同窓会の顧問の一人として、各期の卒業生と接する機会が増えているが、どの分野に進んだ人もそれぞれ立派な社会人に成長しているのに、感心させられる事もしばしばで、たのもししい気がしています。

この度、本館前に同窓会館の性格をもつ建物の建設計画が、二十周年記念事業の一つとして企画、実行に移されようとしています。世間に出れば、仲々気の許せる仲間も出来にくくなるのが常だが、関係者一同の協力で会館完成の暁には、気軽に集つて、色々と有意義な時を過ごす機会も増えるだろうと今から楽しみにしています。では又、元氣でお会いしましょう。



藤田家将先生

ご栄達を願う

白陵高校OB諸氏、如何お過ごしですか。夫々に職場や家庭で活躍のことと存じます。私も白陵に勤めて十七年。一男二女にも恵まれ、今では職員の中でも最古参。最も白陵発展に尽力せねばならぬ立場にありながら、未だ何の貢献も出来ずに、のほ、んと暮しています。

さて、この度、会報の創刊にあたり、一言をと言われましたが、ご存知の通りの武骨者、お祝の言葉も満足に表わせませんが、改めて十七年間を振り返つて見ると、君達の白陵時代の、その時々が目に見え、懐かしく思い出されます。創立当初の元氣者達、今では良き父母とならわれているでしょう。三期生の入学で生徒数も倍増、ドブ中先生大活躍でした。その頃、屋上に三十二枚の畳を敷き、ビニール表が焼けつくような熱さにバケツで水を撒き乍らの練習、投げるよりも滑り合ひの柔道部の創部でした。六期生では、反骨精神旺盛にして良く頑張り、初の東大合格者、学校をあげての大喜び。九期生の頃、オイルショックで物価急騰の最中に二八畳敷の独立家屋。



赤松初夫先生

K先生のこと

私が赴任した昭和四十年九月に寮が開設され、K先生のご指導のもと、寮監を務めさせていただいた。先生は、学校全体の管理経営

初電話 太平洋を

越えて来し

孤舟

から便所掃除に至るまで、一手に引き受け、自ら実践し、背中で手本を示された。ある時、私はノックもせず寮の事務室に入っていたが、突然強い罪悪感におそわれ、思わず退出してしまったことがある。その場に崩れてしまわなければ、に疲れきった先生のお姿を見てしまったのだ。そんな場合、ねぎらいの言葉をかけるのが常識的なのだろうが、私には、それが出来なかつた。それほどまでに先生は人の前で疲れたご様子は見せられなかつたのである。

四十一年の秋、猛烈な風台風が兵庫を直撃した。寮の上の学生食堂の屋根から無数の鳩(一瞬そう思った)が、一斉に飛びたつたのごとく瓦が飛散した。まるでそれが合図でもあったかのようになり、先生は「皆をロビーに集めなさい。」と言われた。異常な雰囲気の中で全員が集合完了した途端、窓ガラスが次々と不気味な音を響かせて割れはじめたのだ。夕景、生徒の部屋を見てぞっとした。ガラスが、ベッド、扉、床タイルにまでも突きささっていたのだ。先生から直接言葉で指示を受けたのは記憶の中ではこれ一回だけである。その先生に無沙汰をし、ただ申し訳なく思っているだけの私である。



藤田嘉久先生

白陵の思い出

丁度十七年余り以前である。雪の日の入試の手伝いに大学の卒業を待たずに出かけたのは。買ったのホンダの50ccのバイクに乗って自宅から一時間程の道程を出かけた。白陵がバンカラを特色とするという気風からか腰から手ぬぐいをさげた二、三の生徒が「オース」とあいさつする。音楽室や今の食堂で、高三・二の授業をやったが、雨なんか降ろうものなら傘をさしてぬかるみに足をとられながら出かけた。生徒も靴のままコンクリートの床もドロドロ。それでも、出来たての学校の熱気があふれていた。生徒もよくしごかかれ、どやしつけられていたが、今から白陵の伝統を作ろうという気があつて、自ずと統制がとれていたように思う。白陵に剣道部がないということ、呼びかけに応じてきた連中が七、八名いたであろうか。さしあたって練習場がない。本館屋上のコンクリートの上で素足でやる。なんとも痛いし足の裏の皮がむけてしまうので、ズック靴をはいてやった。それから後、別館が建ち、解放されたパイプハウスで練習したが、それは



中安久隆先生

思うまま

それで床が抜けるやら窓ガラスに竹刀があたつて壊れるやらで散々であった。防具も、家にあつたのを各生徒が持ち寄つてきた。中には祖父が使つていたのとか、コテも白黒と左右が色違いとか。学校も年輪を重ね、剣道部も盛衰はあつたものの命脈を保つてこころまできた。個人的には剣道の上でも、学業の上でもすばらしい成績を収めて卒業していく者が多いのは嬉しいことである。文武兼備した学風とは今少なくなつていっている中で、この命脈だけは保つていきたいと思つている。それから十七年、白陵は名実ともに名門校に数えられるようになっている。しかし人間教育の名門校への道は果てしがない。その理想に向つて私も微力を尽すつもりである。それが白陵に連なるもの使命であらうと決意を新たにしている昨今である。

学生気分もぬけきらないまま本校に赴任して以来、はや十四年の歳月が過ぎ去ろうとしている。すぐに高三(第三期生)の生物担当毎日予習に追われた日々、うすぎたないアパートでの一人暮らしとわびしい下宿生活、生徒との楽しい団らんのととき、心暖かい見舞い、文化祭での演劇指導と出演運動会での仮装行列、修学旅行引率、数々の先生方との別れ……。今となつては懐しい思い出となつてよみがえつてくる。現在十七期生の高三担任、来年五冊目のアルバムを手にする事になる。今は東大、京大をはじめとして進学面で飛躍的な発展を上げてきたのは喜ばしい事実である。反面、私の心の中に白陵生の大きな忘れ物があるような気がしてならないのはなぜだろうか。個性にあふれ友情に厚く不良っぽいやんちゃ坊主もたくさんいたあのころの白陵生独自の活気あふれる姿がややみられなくなったのは寂しい思いがする。卒業生も二千名余りになり、父親母親として責任を感じながら社会人として活躍している者、学生生活を満喫している者、様々だと思ふ。いくつかの小さな峠をのりこえてきたが、ここに二十本目の年輪を刻むにあたり、私学白陵としてあらゆる面でさらに険しい峠にさしかつた事は事実である。この時に當つて現実を正確に把握し、適確な判断と大いなる勇氣をもつて、更に大きな責任を遂行していきたいと思つている。卒業生諸君の大きな支援の下にこの険しい峠を無事のリこえた時には、白陵にも本当の意味での「伝統」が築きあげられることと確信している。

姫路市役所白陵会

名倉 正明(2)

私が、市役所で、初めて自己紹介した時、白陵卒業だと言うと、「僕も、私も」と、数人からの声を聞き、大変嬉しく思つたのを、今でも覚えていいます。

それから、一年半ほど後に、五期生の橋本義仁君や、浅田和豊君達の努力により、会が結成され、現在、二十数名の比較的小じんまりした所帯ですが、それだけに集合しやすく、和やかな雰囲気をもつた会に育つていいます。

活動と言いますと、春の新入職員歓迎会、夏の納涼ビヤガーデン探訪、年末の忘年会、等々で、これからの奮起活躍を乞うご期待と云うところです。

結成後、日も浅い会ですし、まだまだ、ペーペーばかりの集団ですが、遠くない将来、姫路市役所の中核的存在たらん力を、個人々が、裡に秘めた集団なのであります。

訃報

小谷良行氏(寮食堂経営)
十一月十七日、心筋梗塞により急逝。
長年お世話になりました。
心より御冥福をお祈りいたします。

旅立つは 未知の世界の 芽ぶく木々 (中安久隆)

白陵会役員名簿

副会長	黒坂康夫	1
会長	黒川芳一	1
全副会	沼田好道	3
全副会	上田喜裕	6
全副会	芳木健憲	1
全副会	長瀬憲雄	3
全副会	清濱明久	5
全副会	大内義博	2
全副会	川内義文	2
全副会	正井和野	1
全副会	伊藤達也	1
全副会	磯野一和	2
全副会	黒野新義	3
全副会	鎌田芳寛	4
全副会	亀田佐一郎	5
全副会	足立啓介	5
全副会	萩本義正	8
全副会	原中茂	9
全副会	坪田奈津樹	10
全副会	吉田達矢	10
全副会	志方正彦	11
全副会	樽井久樹	12
全副会	竹中邦夫	13
全副会	宮井仁夫	15
全副会	白井晃洋	16
全副会	黒田正洋	3
全副会	原井孝昌	4
全副会	村井正英	6
全副会	長井龍月	7
全副会	下村康夫	8
全副会	小紫貫昇	10
全副会	小紫貫昇	11
全副会	三木省吾	12
全副会	大島俊郎	1
全副会	遠山寛	1

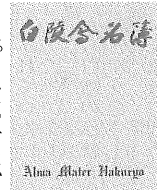
(数字は卒業回数)

白陵会ニユース

★会員数 二、五〇一名
本会の会員は、白陵高等学校の卒業生からなっています。一回生から十六回生まで、現在、二、五〇一名です。

★白陵会名簿申し込み受付中

ご好評をいただきました。白陵会名簿の残部があります。なお、今回、新たに十六回生分を別刷、添付しました。まだの方は、ぜひこの機会にお申し込み下さい。



- 販売価格 三、〇〇〇円(送料込)
- 申し込み方法
現金書留に代金をそえて、住所、氏名、卒業回数を記入の上、左記へお申し込み下さい。
- あて先 千六七六
高砂市阿弥陀町阿弥陀 二二六〇
白陵会事務局

★住所変更の際は、ご連絡を

転宅、就職、大学進学等で住所を変更された場合は、ぜひお知らせ下さい。次回の名簿編集の資料とさせていただきます。

なお、昨年の名簿の訂正事項および、その後住所変更については、次回の名簿で改正させていただきます。

★西脇を中心に地域同窓会誕生

今年七月に、西脇市を中心とした二市三郡(西脇、加西、加東、多可、氷上)に「陵友会」(長尾芳明会長・4回生)が誕生しました。長尾会長のお話によると、以前から、西脇地区のご父兄の間で、この地域から白陵へ進んだ者の大半は、寮で同じ釜の飯を食った仲。それなら地域ぐるみで絆を深め、親睦を図ってはという要望があったそうです。このようにして生まれた会で、育友会役員OBの高瀬(6)、石井(10)、上田(12)、杉本(13)の四氏には、当初から大変ご尽力いただいたそうです。現在、会員数七十六名、各地区の役員が集って、今までに三回程役員会を開き、お正月には「西脇地域に陵友会あり」と言われる日がくることを確信し、今後ますますのご活躍を希望して止みません。

柔道部OB会の活動 大崎章快(6)

柔道部は、昭和四十二年創部以来、限られた時間内の猛練習によって、数々の栄誉を勝ち取り、多数の有段者を送り出してきました。これは、藤田家将先生のご指導の賜と深く感謝しております。さて、OBも百名を越え、各方面で活躍するようになるとOBの間で柔道部OB会結成の気運が高まってきました。それを受けて昨年六月、「白陵中・高等学校柔道部OB会」―会長、沢田照峰(3)が発足、今年一月二日には、母校武道館で、第一回総会並びに在校生部員交流会(試合)を行いました。久し振りに会う先輩、後輩は、昔話や近況報告に話はずみ、試合では応援の声が飛び交うなど楽しい一時を過ごしました。本会では、総会の外、母校柔道の支援、会員相互の親睦などを目指しており、今後幅広く活動を拡げていきたいと思っております。皆様方のご支援の程、お願い申し上げます。

白陵会収支計算書

昭和56年7月31日現在 (単位円)

支 出	科 目	金 額	収 入	
			科 目	金 額
印刷費	2,938,940	会名簿代費	1,480,000	
通信運搬費	788,960	会名簿代費	3,083,500	
支払手数料	76,510	広告費	1,095,000	
会議費	131,520	寄付金	72,000	
慶弔費	15,000	預け金利息	151,202	
雑費	29,880	前期繰越	2,471,867	
後期繰越	4,372,759	前期繰越	2,471,867	
合 計	8,353,569	合 計	8,353,569	

『編集後記』

創刊号いかがでしたか。

タイトルは、名簿の副題として、園長先生にいただいた「Alma Mater Hakuryo」の校名部分を漢字に置き換えて命名しました。

「白陵」の題字は、第二任教頭の山本武夫先生にお願いしたものです。

お蔭で、白陵会の会報に似合ったスマートな顔をもつことができましたと喜んでます。

お忙しい中、ご執筆いただいた方々はじめ関係者の皆様、ご協力ありがとうございました。

創刊号というものはすべてが初めてのことで、不行届な面や、まづい点が多々あると思いますが、会員諸氏の暖かい励ましと助言をいただいで、より良い会報に育てていきたいと思っております。

(編集委員一同)